

方言の条件表現：『方言談話資料』と『方言文法全国地図』からの研究の可能性

著者	三井 はるみ
雑誌名	国立国語研究所創立50周年記念 研究発表会資料集 ： 歩こう日本語の世界を
ページ	15-22
発行年	1998-12-14
URL	http://doi.org/10.15084/00003297

方言の条件表現

— 『方言談話資料』と『方言文法全国地図』からの研究の可能性 —

言語変化研究部第1研究室 三井はるみ

要旨

方言の条件表現についての研究をすすめて行くための手がかりとして、青森市方言の順接仮定条件表現を例に取り、『方言談話資料』を主な資料として、共通語との対照による体系記述を試みた。その結果、この方言の接続形式バについて、(1) 後件の反期待性という制約が効かない、という特徴が見出され、(2) 前件の確実性に関する制限が緩やか、(3) 事実的用法を持つ、という可能性がうかがわれた。また、接続詞的用法、提題・対比用法においても共通語との異なりが見られた。最後に『方言文法全国地図』所収(予定を含む)の順接仮定条件表現項目の地図を提示し、方言の条件表現形式の分布状況を紹介する。

キーワード：条件表現 順接仮定条件 青森市方言 『方言談話資料』 『方言文法全国地図』

1. はじめに

条件表現は、「接続表現のうち「て」「つつ」などによる事態の単なる時間的連続、あるいは並行的な現象として把握されるものを除き、前件と後件とが、なんらかの因果関係をもって接続される表現」(小池他(1997))のように定義される表現分野で、文献国語史や現代語文法研究の中では、厚い研究の蓄積がある。一方、方言研究の分野では、例えば、アスペクト表現や可能表現などに比べると、それ自体がテーマとして取り上げられることはあまり多くなかった。しかし近年、文献国語史や日本語教育の立場からも留意が向けられているように(備前(1993), 小林(1996)など)、各地方言には、過去の中央語や現代共通語との対照上、興味深い事象が観察される。

本発表では、一つの例として青森県青森市方言を取り上げ、現代共通語と対照しながら、この方言の順接仮定条件表現の体系について記述する。この方言は、共通語と同じ順接仮定の文法形式「バ」を持つが、その用法が共通語とはやや異なっており、その異同を捉えることを一つの目当てとした。そして最後に、『方言文法全国地図』第3集および、現在印刷中の第4集の中から順接仮定条件表現に関わる項目の地図(OHP)を提示し、方言の条件表現形式の分布状況を紹介する。

なお以下では、条件表現の中でも主に、順接仮定条件表現を扱っている。順接の仮定条件表現とは、前件(条件接続形式より前)で表される仮定的な事態が実現した場合に、それに伴って、順当な関係にあると捉えられる後件(条件接続形式より後)の事態が実現することを表す表現で、共通語では、「ば」「と」「たら」「なら」などが順接仮定条件を担う代表的な形式である。

2. 青森市方言の順接仮定条件表現

2.1. 現象 — 青森市方言の「バ」と共通語の「ば」 —

『方言談話資料(3)』所収の「青森県青森市大字牛館」の談話の中に、次のような順接仮定条件の接続形式「バ」の用法が見られる。(以下、条件接続形式を示すときは、共通語を平仮名で、方言を片仮名で表記する。)

① オラキャ ボークーコー コヘデ コンダ アノボークーコーサ ワラハンドバ ヘデセア
俺は 防空壕(を) こしらえて、 今度、 あの防空壕に 子どもたちを 連れてよ、

ソステ コンド ナゲバ キケルテナー ナゲバ ヘコキ トンデル ヤヅサ
そして 今度、 泣くと 聞こえるといつてなあ、 泣くと 飛行機、 飛んでる 奴に

キケルハンデ ワラハンド ナガヘレバ マネッテ ボークーコーサ オエデ モノ カゲデア
聞こえるから、 子どもたち(を) 泣かせると だめだといつて、 防空壕に 置いて、 物(を) 掛けて

(1913生・女性／『方言談話資料(3)』「9.青森空襲」123ページ6行)

この3ヶ所の「バ」の用法は、共通語の「ば」の用法からみると違和感がある。それぞれを、共通語でこの文脈の中での自然な表現にするには、次のように、別の条件表現形式を使う方がよい。

- ①-1' 子どもが ?泣けば／泣くと／泣いたら／泣いては 聞こえるといってなあ、
- ①-2' 子どもが ?泣けば／泣くと／泣いたら／泣いては 飛行機で飛んでる奴に聞こえるから、
- ①-3' 子どもを ?泣かせれば/?泣かせると／泣かせたら／泣かせては だめだといって、

このように、青森市方言の「バ」と共通語の「ば」は、いずれも順接仮定条件文を作るものの、その用法にずれがあるようである。この「ずれ」がどのような「ずれ」なのかを説明することが、今回の用法の整理の一つの目あてである。このような「ずれ」の背後には、他の条件接続形式を含めた、青森市方言と共通語との体系の違いがあるものと推察される。

青森方言の「バ」の用法に触れた先行研究には、日野(1955)がある。共通語で「と」が自然な文脈で「バ」が用いられる、という観察が、次のような例文によって示されている。

- ◎ シンジガニアルケバ、エエオトガシマシ。(しずかに歩くといひ音がします。一寺の案内僧の口上) こういう場合「アルクト」とはふつう言わない。故に「雨フルト困ルナ」とは言わずに「アメフレバコマルナ」という。

しかし、どのような場合にそうなるのか、という説明まではなされていない。

2.2. 資料

分析のための主な資料としては方言談話の録音文字化資料を用いる。条件表現の体系記述に際しては、述べられている事態が事実とどのような関係にあるか、前件と後件がどのような関係を持つか、などの文脈、構文に関する手がかりが重要である。文字化資料は、対象とする表現形式を、実際に用いられる構文や文脈の中で観察できるので、文法形式の意味用法の分析のために有効な資料である。ただし、談話資料を資料とした場合には、その方言に存在するがその談話には現れなかった事象については知ることができないし、また、表現形式に対する話者の意識はわからないという限界もある。したがって談話資料によって得られた分析結果は「仮説」であり、後の面接質問調査によって検証されるべきもの、という性格を持つと言える。

ここで主な資料として用いたのは、国立国語研究所編『方言談話資料(3)』、『同(9)』、『同(10)』所収の、青森県青森市大字牛館の談話である。収録地は青森市中心部から南へ約6kmの集落で、方言区画上は津軽方言に属する。話者は1903年から1913年生まれの男女計4名。談話の内容は、昔の生活やできごとを話題とした約1時間の自然談話と、「品物を借りる」「道で知人に会う」など8つの短い場面別の談話からなる。収録年は1978年と1979年。この資料から、共通語訳で「ば・と・たら・なら」が当てられている部分を中心に、順接仮定条件表現に用いられる接続形式の用例を採集した。

以下、用例を挙げる際には、短いあいづちや言い差し、言いよどみなどを省くことがある。また文脈の理解のために、必要に応じて状況の説明を〔 〕に入れて加える。さらにこの資料では、方言の文字化の下に共通語訳を対応させて示しているが、以下では便宜上、方言部分を全て引用した後に続けて共通語訳を示す。共通語訳は原文のままとし、〈 〉に括る。その後、(3,123-6,13f)=(3巻,123ページ6行目,1913年生れの女性)のように、用例の所在と話者の属性を示す。

また補助的な資料として、日本放送協会編『全国方言資料 第1巻』(以下、NHKともいう)所収の、同じく津軽方言に属する青森県南津軽郡黒石町(現、黒石市)の談話、『方言文法全国地図』(以下、GAJともいう)の青森県の調査結果(特に、大字牛館と最も近い(直線距離で約8km)調査地点である青森市大字滝沢字下川原(2793.04)の回答)を参照する。

2.3. 順接仮定条件を担う形式

青森市牛館方言の談話資料に現れた、順接仮定条件表現を担う代表的な形式は、バ、ダラ、タラの3種である。この他に、もっぱら非仮定的条件を担うタキヤが見られる。これら4形式の上接語との接続の形態を表にして示す。動詞「行く」、形容詞「高い」、名詞「昔」に接続した形を例として挙

げる。一部実際の用例からの類推を含む。形容動詞に接続した例はなかった。準体助詞・形式名詞は「ア」で代表させる(ほかに、ヤ、ン、ネ、ワケがこの位置に現れた)。表記は文字化資料に用いられている表記による。ただし促音は表記し、入り渡り鼻音は表記しない。その接続にあたる例が現れなかった部分は空欄にしてある。空欄にはたまたま用例が現れなかっただけの空欄と、文法的に意味のある空欄があるかもしれないが、ここではその区別はできない。(例えば「高い」にダラが接続すると「タゲアアダラ」という形になると予想される。この形は談話資料には現れなかったが、GAJ第3集150図「高いなら」では青森市滝沢の回答として得られており、牛館方言にもある可能性が高い。)

青森市牛館方言の順接仮定条件表現の形式

	バ	ダラ	タラ	タキヤ
動詞	エゲバ, エグアダバ	エグアダラ	エツタラ	エツタキヤ
形容詞	タゲアバ			
名詞+ダ	昔ダバ, 昔ダアダバ	昔ダラ, 昔ダアダラ		

※用例に現れた、バ・タラ・タキヤが他の種類の動詞に接続する場合は次のとおり。
 バ/過ぎる:スキレバ, 付ける:ツケレバ, 来る:クレバ・キレバ, する:ヘバ
 タラ/引ける:フケダラ, 来る:キダラ
 タキヤ/聞く:キダキヤ, 見る:ミダキヤ, 来る:キダキヤ
 ※用例に現れた、バが否定形に接続する場合は次のとおり。
 行かない:エガネバ, 早くない:ハヤクネバ

ここから、形態の面について次のことが見て取れる。

第一に、この方言にはトが現れない。トはNHKの黒石町の談話にも見られず、GAJの青森市滝沢の回答にも現れない。「留守のときに来られると困る(第3集116図)」「お前が行くとその話はだめになりそうだ(第4集169図予定)」という調査文に対する回答は、[kũ raereba][k i raereba], [e ɔ eba]であり、バが用いられている。これらのことから、この方言にはトが欠けている可能性が高いと見られる。そして、「と」の用法の少なくとも一部をバが担っていることが予想される。上述の日野(1955)の、共通語で「と」が自然な文脈で津軽方言ではバが用いられる、という指摘は、このような背景を持ったものと考えられる。

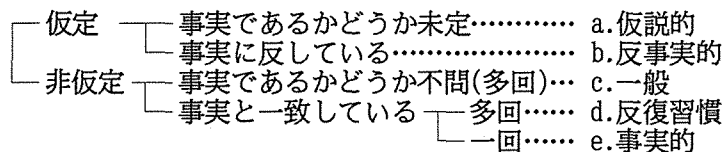
第二に、各形式の接続は次のようである。このデータの範囲で一応の整理をしておく。バは、動詞の仮定形、形容詞と助動詞ダ(断定)・ネ(否定)の終止連体形に接続する。ダラは、名詞・準体助詞に接続する。タラ、タキヤは、動詞の連用形に接続する。(「ダラ」という音声で実現されているものの中で、タラと同じ接続の形をとるものは、ダラではなくタラに分類している。)

第三に、ダバ、ダラが動詞に下接するときは、準体助詞または形式名詞を介する例しか見られない。ダバ、ダラは断定の助動詞ダの活用形とも位置付けられるもので(此島1968, p.140など)、この点で「なら(ば)」に対応する。しかし「なら(ば)」は用言に接続するとき、準体助詞を介して下接する(「するのなら」)ほか、直接続く(「するなら」)こともできる。ダバ、ダラがダの終止形と同様に名詞相当のものにしか接続しないとすると、品詞論的に見て、「なら」が接続助詞的性格を持つものに対して、ダバ、ダラは助動詞ダの一活用形としての性格がより強い、とすることができよう。

2.4.各形式の用法 — 前件・後件の事態と事実との対応関係に基づく分類 —

次に、上に挙げた各形式が、それぞれどのような用法の広がりを持っているかを見ていく。バ、ダラ、タラの3形式はいずれも順接の仮定条件を担うが、この中でバは必ずしも「仮定」とは言えない用法を併せ持つ。表す「仮定」の内容も一様ではない。またタキヤはもっぱら非仮定的な条件を担う。

各形式の用法を整理するにあたって、ここでは、先行研究(特に前田(1991,1997))を参考に、次のような用法分類を行った。順接仮定条件形式の「仮定」と「非仮定」の用法に関するこの分類は、述べられている事態が現実の事実とどのような対応関係にあるか、という観点を基本的な基準とし、さらに「非仮定」については、事態が一回性か多回性かという観点を取り入れた分類である。



ただし用例の中には、「条件」の用法からはかなり離れていて上の枠組みに収まらないものがある。一つは、名詞に条件接続形式が下接した場合で、次のように、前件と後件がそれぞれ独立の「事態」を表しているとは捉えにくいものが多い。

② エマダバ クルマデ アサガタテ ウン マー モドダバ リアカーモ ネア。〈今なら車で歩
くけれど、うんまあ、元ならリアカーもない〉(3,55-11,03m)

③ B: オーバーチャダラ モー ハー ゴンボダアンテ マエデ マッタベスー。/D: アー ンナ
ゴンボダラ マガネ。〈B: お婆ちゃんは、もうはあ、牛蒡なんか(の種を)まいてしまつたら
うね。/D: ああいや、牛蒡はまかない。〉(10,30-11,10m/30-13,08f)

この場合のダバ、ダラは、共通語の「は」に似た働きをしている。^(註1)

また用言ではあっても、次の例のように、その実質的な意味が薄まったり形が変わったりして、前置きや、接続詞、終助詞などに類した慣用的な表現となっているものがある。

④ マンツ エマガラ ミレバ コーリカ° スダケアンタ モンダエナー。〈まず今から見ると、高
利貸のようなもんだよなあ。〉(3,52-12,10m)=前置き

⑤ A: モス タエネバ ニジョー モテ エッテモ エンダハンデ。/B: ウン ヘバ メヤグダ
バテ ニジョー カエルガナー。〈A: もし足りないなら、二挺持って行っても良いんだから。
/B: うん、じゃ、迷惑だけれど、二挺借りるかなあ。〉(9,29-8,03m)=接続詞的^(註2)

⑥ コッチャ ミンズ コネバ ナースロ カダマテマ~~デ~~バナー。〈こっちへ水(が)こないと、苗
代(が)固まってしまうではないか。〉(9,132-4,03m)=終助詞的

さらに、後件が「エ(いい)」「マエネ(だめだ)」という、前件の事態を評価するような非事態性の内容である場合、条件接続形式以下が全体として一つの述語に近い表現になる。①-3がその例である。

これらの用法は、「条件表現」という枠組みから見ると、周辺のものと位置付けるのが適当であろう。そこでこれらはひとまず検討対象から外しておくことにする。^(註3)

このように範囲を定め、以下では上述のa.~e.を順接仮定条件形式の基本的な用法分類の枠組みとして、個々の接続形式が仮定から非仮定までのどのような用法で用いられているか見ていく。

4形式のうち、バには、a.からe.までのすべての用法が見られる。

a. 仮説的用法としては、次のような例がある。

⑦ ソエゴソ ハー コゴサ ハス カゲデ ケル フト アレバ カミサマネ マツテモ エー
マツテモ エーナーンテ ヘッタヤダナー。〈それこそはあ、ここに橋(を)懸けてくれる人があ
れば、神様に待っても良い、祭っても良いなんて言ったのだよなあ。〉(3,66-4,03m)

⑧ ココノ エノ ナガモナ ホラ コリヤ ミンズ オワレバヨ スッカド コンダ エノ ナガ
ミナ スマツステ ミンナスステ テズダエサネア マネナー。〈ここの〔水に浸かった〕家
の中もな、ほら、これは(洪)水(が)終ると、すっかりこんど、家の中、みんな、始末して、みんな
で手伝いしないとだめだなあ。〉(10,202-4,03m)

例えば⑦では、前件の「コゴサハスカゲデケルフトアル」という事態も、後件の「カミサマネマツル」という事態も、まだ実現していないが今後実現する可能性のある事態として提示されている。そして、仮に「コゴサハスカゲデケルフトアル」という事態が実現した場合は、それに伴って「カミサマネマツル」という事態を実現させてもよい、ということが述べられている。⑧もこの点は同様である。また、①-1、①-2もこの用法の例である。

なお「動詞+準体助詞・形式名詞+ダバ」には、次のような用例がある。

⑨ ホントネ ケアッテ オユワキサン ナンダ オヤマサ サンケニ エグネダバ ムカスノ
ー エーフタ ナー。〈〔昔のにぎやかな参詣の様子を思い出して〕ほんとに却って、お岩木山
(つまり)何だ、お山に参詣に行くのなら、昔の方(が)良かったなあ。〉(3,103-5,03m)

この例は、前件を仮定的事態と捉えて仮説的用法に含めた。

b. 反事実的用法としては、次の例がある。

⑩ アノ フトダキャ ソンチョー サネバダキャ マンダ マダ マンダ マダダキャ コーユー
ハスダキャ タダネンデア。〈あの人が村長(を)しないならば、まだまだまだまだ、こういう橋

は建たないんだ。〉 (3,76-12,10m)

この例では、前件の「アノフトソンチョーサネ」という事態も、後件の「マダハスタダネ」という事態も、実際には実現しなかった事態である。しかしそれを仮に実現したものと仮定し、もし「アノフトソンチョーサネ」という事態が成立していれば、それに伴って「マダハスタダネ」という事態も成立してしまっていたら、ということが述べられている。

c.一般条件用法は前件のもとでは後件がいつでも時間を超えて成り立つということを述べる用法で、表される事態は具体的な主体による個別の事態ではなく、不特定の主体による一般的な事態である。

⑪ ヘナガ オボデダ ワラス ロー ヘナガガラ オツダ スラネデー ウー ネケ° デ キタ
ロー ソスタ フトドモ ナンニンモ アツタゼア。〔略〕 ソエゴソ ワラスサ スヅカ°
テレバ ヅブデモ マンダ ホロ エノヅ ナグスベ。〈〔空襲を逃れて来た人の中には〕背中
(に)おぶっていた幼児が、ほらあ、背中から落ちた(のを)知らないで、うん、逃げて来た、ほら
あ、そういう人達も、何人もあったという。〔略〕 それこそ、幼児にかまっていると、自分で
も、またほら、命(を)なくするだろう。〉 (3,131-4,03m)

この例では、空襲から逃げるという状況の中では、前件の「〔おぶった〕ワラスサスヅカ° テラ」という事態が実現した時には、いつでもだれにでも「ヅブデモエノヅナグス」という事態が生じる(あるいは生じる可能性がある)、ということが述べられている。

d.反復習慣用法としては次のような例がある。

⑫ カワサ コーリ トニ エグアヅ キゲバセナ ナンボ ワラハンドナカ° ラデモ レア ナミ
ダ デルエンテ アツタデー 〈〔毎年、岩木山参りの人たちが〕川に垢離(を)とりに行く(を)
聞くとよな、いくら子どもながらにでも、あれえ、涙(が)出るようであったよ〉 (3,94-9,13f)

この例では、前件の「カワサコーリトニエグアヅキゲ」という事態が実現したときには、それに伴って後件の「ナミダデルエンタ」という事態が実現し、しかもそれが過去に繰り返して起こった、ということが述べられている。

e.事実的用法は、過去のある時点で実現した一回的な事態について述べる用法で、前件と後件はともに、既に実現した一回限りの事実である。

⑬ ヤゲダ アドサ エゲバ スンダ フトモナモ ソヅコヅネ ゴロゴロゴロテヨー ウン ヤヤ
ミラエダ モンデ ネフタエナー。〈〔青森空襲の後〕焼けた跡へ行くと、死んだ人も何も、そち
こちにごろごろごろとよう、うん、やあやあ、見られたものでなかったよなあ。〉 (3,130-7,03m)

⑬は、「〔青森空襲の後〕ヤゲダアドサエグ」という一回限りの事態が実現したのにもなって、後件の「スンダフトゴロゴロテ(転がっている)」という事態を発見した、ということ述べている。

以上のようにバがさまざまな用法で用いられているのに対し、ダラとタラは、a.仮説的用法でしか現れなかった。

⑭ オエノ ババヨ ダーエステ。スヌアダラ ミンナ スヌビステ フトゲアリニ ミンナ スネ
バ エドナテ 〈俺家の婆よ、「誰がそんな。死ぬのならみんな死のう」といって、「一回にみ
んな死ぬといいではないか」といって、〉 (3,125-9,03m)

⑮ オヤ 〔略〕 スマツタラ ジェンメアダリ ワランダリヨー フタリデ ズット ヤマ マワ
ツテア トツテ キベスヨー。〈おう(そうだ)。〔略〕 〔山の見回りが〕済んだら、ぜんまい
なりわらびなりよ、二人でずっと山(を)回って採って来ようよ。〉 (10,140-5,03m)

一方、タキヤはe.事実的用法でだけ用いられる。

⑯ ドンダカダモテ アノ スエドノ ハスノ アツツア エタキヤ クルノ コネノテ ミンナ
モノ カブテ クルアダエナ。〈どうだかと思つて、あの水道の橋のあちへ行ったら、来るの
来ないと〔空襲で焼け出された人たちが〕みんな物(を)被って来るのだよな。〉 (3,128-4,03m)

以上の分類の結果を用例数とともに示すと、次の表ようになる。次節での検討のために、ダバはバと別立てにした。実際に用例にあたってみるとどの用法にあたるのか迷う例もあり、数字は絶対的なものではないが、目安にはなると思われる。参考として、共通語の各形式の用法を、前田(1997)からごくおおまかにまとめ直して挙げる。

青森市牛館方言の順接仮定条件形式の用法別用例数

	バ	ダバ	ダラ	タラ	タキヤ
仮説的	24	4	2	6	
反事実的	1				
一般条件	5				
反復習慣	70				
事実的	6				9

共通語の順接仮定条件形式の用法

	と	ば	なら	たら
仮説的	○	○	○	○
反事実的	○	○	○	○
一般条件	○	○	×	
反復習慣	○	○	○	
事実的	○		×	○

※原表の①④は省き、判定の記号をおおまかにまとめるなど前田(1997)の判定を生かしつつ原表を大幅に改変した。
 ○：用例があり、使える(原表の◎と○)
 空欄：用例がほとんどない、制限がある(原表の■と△)
 ×：使えない(原表の×)

ここから次のようなことが見て取れる。

バ, ダラ, タラの3形式の中ではバが圧倒的に多い。用法別には反復習慣用法が多いが、これはこの資料の談話の内容によると思われる。資料の大部分を占める自由談話は昔の生活を話題としており、しかも個別的な一回性のできごとや事件よりも、過去のある時代の様子が一般化されて語られることが多い。そのことが用法の偏りに反映しているものと思われる。

一方、バに事実的用法があることは注目される。この用法は共通語の「ば」にもあることはあるが用例は少なく、使われるとしても後件が過去形でない方が自然であったり、かたい・古いなどの文体的なニュアンスを帯びているとされる(国立国語研究所1964など)。この方言でどのくらい生産的、一般的に用いられる用法かということが、共通語との対照の上で注目される。

また、タラは仮説的用法でしか現れず、仮定的用法と事実的用法を併せ持つ「たら」と異なる可能性がある。タキヤが事実的用法にだけ現れる点とともに、此島(1968, p.144)の記述と一致する。

2.5. 仮説的条件文におけるバ, ダバ, ダラ, タラの違い

前節での用法分類により、バ, ダラ, タラの3形式は、順接仮定条件表現の中心的用法である仮説的用法を共有していることがわかった。そこでここでは、仮説的条件文に用いられたときの各形式の使い分けについて、引き続き共通語と対照しながら検討する。なお、ダバはダラと共通し、バとは異なる傾向を持つため、以下ではこれをバから分けて、バ, ダバ, ダラ, タラの4形式として扱う。

2.5.1. 共起する文末表現の制限

共通語の4種の条件接続形式のうち「ば」「と」には、働きかけ(命令・依頼・勧誘), 表出(意志・希望)の文末表現とは共起しないという文末制限がある。ただし、前件の述語が非動作性である場合は「ば」は可能である。「たら」「なら」にはこの制限はない。

- 朝早く駅に ?着けば/?着くと/着いたら/着くなら 電話してください。
- 道が わからな ければ/?いと/かったら/いなら 電話してください。

青森市牛館方言の用例を見ると、バについては、前件述語が動作性(例文①-1,2,⑧), 非動作性(例文⑦)にかかわらず、文末に働きかけ, 表出の表現が共起している例は見られない(仮説的条件文24例中0例-以下「0/24」のように表示する)。ダバにも例がない(0/4例)。一方ダラ, タラには、文末に勧誘表現が共起している例がある。例文⑭「スヌアダラ ミンナ スヌビス <死のう>」, 例文⑮「スマッタラ [略] トツテキベスヨ <採って来ようよ>」がその例である(ダラ1/2例, タラ4/6例)。また、NHKの黒石町の談話には、タラ, ダバに依頼の文末表現を取る例があるが、バにはない。

⑰ m ソヘバ ナンダオネシ ドシテモ カウンダバ ソノ イー オジャコ イッポン タノミシテシ <それではなんですよ、どうせ買うならそのいいお茶を1本お願いします。> (45-9)

ここからダバ, ダラ, タラにはこの文末制限が働かないことがうかがわれ、この点で「なら」「たら」に類似している。バには、この範囲では「ば」「と」と同様の文末制限を破る例はない。

2.5.2. 前件と後件の事態の時間的前後関係

文末制限のない共通語の「たら」と「なら」の間には、「たら」が、前件の事態が生じた後で後件が起こる、という時間的前後関係が必須であるのに対して、「なら」にはそのような関係は必須で

はないという違いがある。

- 〔自分が今読んでいる本を読みたそうにしている友人に〕お前も ?読んだら／読むなら 貸してやるよ。

青森市牛館方言の例を見ると、タラの文はすべて、例文⑮のように、前件の事態(「スマル〈済む〉」)が生起した後で後件の事態(「トツケル」)が生起する、という時間的關係にある(6/6例)。これに対しダラの文では、例文⑭のように、前件(「スヌ」)と後件(「ミンナスヌ」)の事態は同時に生起するもので、前後関係はない(2/2例)。またダバの用いられた例文⑨も、前件の生起の後に後件が生起する関係ではない(3/4例)。

ここから、ダバ、ダラには前件と後件の時間的前後関係について、少なくとも前件生起後に後件が生起するという制約はないことがうかがわれ、この点で「なら」と類似している。タラには、前件の生起後後件が生起するという、「前件の完了性」の制限を破る例はない。

2.5.3.前件の確実性

共通語の「ば」と「たら」について、前件の事態が、実現することが確実と文脈上解釈される事態である場合には、「たら」が用いられて「ば」は用いられにくい、という指摘がある(益岡1993など)。

- 〔料理の手順の説明で〕鍋に材料とスープを入れます。火にかけて、煮立ったら/?煮立てば火を弱めます。

青森市牛館方言では、バに例文⑧のような用例がある。この例では前件の「ミズオフル〈洪水の水が引く〉」という事態は、常識によって、いつかは必ず実現することが確実と捉えられる可能性の高い事態である。微妙ではあるが、共通語ではこのような文脈では「ば」は用いられにくいと思われる。NHKの黒石町の談話にも次のような類例が見られる。

- ⑧ f スコシ エンボサ エテ ユベ トマテシア バンゲダバ モドルハデネシアく〔うちのお父ちゃんは〕少し遠方に行って 昨夜泊ってね、晩方だったら帰りますから。〕〔略〕
m アレレ シタラシ バンゲ マダ クルハデ キタラ アノー ドコサモ デネデ エテキヘジャくそれならね 晩方また来ますから、帰ってきたら あのう どこへもでかけないで(家に)いてください。〕〔略〕
f ハイ モドレバ ソシテ シャベツテ オクハデアくはい、もどればそう言っておきますから。〕(39-9)

バは、前件が実現の見込まれる確実な事態の場合に「ば」よりも用いられやすいように観察される。

2.5.4.後件の反期待性

共通語では、後件が「反期待性」と解釈できる内容を表し、かつ、文全体が「禁止」あるいは「回避の必要性」といった伝達の意味を担う文脈では、「ば」が排除され、「と」「たら」「ては」が選択される(蓮沼1987)。

- そんな暗い所で本を ?読めば／読むと／読んだら／読んで は 目を悪くしますよ。

これが2.1.に挙げた例文①に関わる問題である。例文①-1「ナゲバ キケルテナー〈泣けば聞こえるってなあ〉」の場合、後件の「〔子どもの泣き声が空襲機のパイロットに〕キケル」ということは、自分の存在を敵に気づかせて爆撃を誘発する事態であるので、全く期待に反する(「反期待性」)。そしてこの文全体は、「ナゲバキケル」ことを「回避する必要がある」という意味を担って表現されている、と解釈される。例文①-3はもっと直接的で、「ナガヘレバ マネ〈泣かせてはだめだ〉」の後件は、前件の事態(「〔子どもを〕ナガヘル」)の成立を望まないという、話し手の否定的な感情、評価が直接表明されている「禁止」の表現である。このような文脈はいずれも、共通語の「ば」が排除される文脈である。

青森市牛館方言のバは、このような、「ば」の使えない文脈でも使用され、しかも用例も多い(8/24例、「肯定+バマ(エ)ネ」という評価的用法が6例)。

以上、仮説的条件文における4形式の使い分けを4つの観点から見てきた。文末制限と前後件の時間的関係の観点からは、バと「ば」、ダラ・ダバと「なら」、タラと「たら」に、それぞれ対応する傾向が見られた。一方、前件の確実性、後件の反期待性の観点からは、「ば」に比べてバの制限が弱いことが観察された。特に後件の反期待性が制限として効かない、という点は、「ば」にはないバの明らかな特徴として注目される。

2.6.まとめ

以上、青森市牛館方言の順接仮定条件表現の接続形式の用法を、共通語の条件接続形式の用法と対照しながら整理してきた。この方言ではバの用法の広さが特徴的である。共通語の「と」「ては」の用法をカバーし、さらに「たら」の用法の一部にも及んでいるようである。

今回の考察は、一つの方言を対象としたケーススタディに過ぎない。しかし今後『方言文法全国地図』を発展的に利用していく上では、他との対照を視野に入れた、各地方言の体系的記述が改めて必要になると予想される。その際に『方言談話資料』のような文字化資料を利用することが、ある程度有効であることを示すことができたのではないかと思う。

3. 『方言文法全国地図』に見る順接仮定条件の接続形式の分布

当日、OHPにより提示する。

〔注〕

1. ダバの例文③のような用法について、日野(1958)は「共通語の「ハ」に対応して提示格を示すことがある」と説明している。「は」に対応して現れるダバは、GAJ第1集10～12図にも見ることができる。共通語の「なら」にも「は」と類似した「提題」や「対比」の用法があるが、ダバ・ダラの用法との間にはずれがあるようである。
2. このようなへバの接続詞的用法にも共通語とのずれが見られる。へバは「すれば」に対応する「セバ」の音声的な変異形である。共通語では「すれば」は接続詞として使われないが、「そうすれば」が使われる。しかし用例⑤のような発話と発話をつなぐ接続詞として「そうすれば」を使うことはできない。次のように別の条件表現形式由来の接続詞には可能なものがある。
B': うん、 ?そうすれば/?(そう)すると/そうしたら/だったら/(それ)なら/(それ)では /じゃ、 迷惑だけど二挺借りるかなあ。
3. ここで除外した用例の種類と数を参考として挙げる。名詞+ダバ(70例)、名詞+準体助詞+ダバ(1)、名詞+ダラ(13)、名詞+準体助詞+ダラ(1)、前置き(10)、接続詞(へバ、ソへバ、スタラ、スタキヤ)(38)、終助詞(12)、形が変化して動詞の形が取り出せないもの(テバ<テレバ<テヘレバ)(11)、評価的用法(42)。ここで「名詞(+準体助詞)+ダバ・ダラ」「評価的用法」として検討の対象から外したのものの中には、前件あるいは後件が事態を表していると考えられるものもあるかもしれない。しかしその点についての明確な判定は難しいので、ここでは形によって一括して扱った。

〔引用文献〕

- 小池清治他編(1997)『日本語学キーワード事典』朝倉書店
国立国語研究所(1984)『現代雑誌九十種の用語用字 第三分冊』秀英出版
国立国語研究所(1980)『方言談話資料(3)』, (1987)『方言談話資料(9)―場面設定の対話―』, (1987)『方言談話資料(10)―場面設定の対話 その2―』秀英出版
国立国語研究所(1989)『方言文法全国地図 第1集』, (1991)『方言文法全国地図 第2集』, (1993)『方言文法全国地図 第3集』, (印刷中)『方言文法全国地図 第4集』大蔵省印刷局
此島正年(1968)『新版青森県の方言』津軽書房
小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
日本放送協会編(1986)『全国方言資料 第1巻』日本放送出版協会
蓮沼昭子(1987)「条件文における日常的推論―「テハ」と「バ」の選択要因をめぐって―」『国語学』150
備前徹(1993)「日本語教育における方言」国立国語研究所編『日本語教育指導参考書20 方言と日本語教育』大蔵省印刷局
日野資純(1955)「津軽方言の文法に関する一考察」『国語学』20
日野資純(1958)「青森方言管見」『国語学』34
前田直子(1991)「条件文分類の一考察」『東京外国語大学日本語学科年報』13
前田直子(1997)「現代日本語の条件文とその指導」AJALT第13回日本語教師のための公開研修講座配布資料
益岡隆志(1993)「日本語の条件表現について」益岡(編)『日本語の条件表現』くろしお出版